

ニ ュ ー ス

Prof. Jakobson の来日について

東京言語研究所主催 1967 年度理論言語学国際セミナーの講師として、7月23日来日、10日間にわたる講義をおこなった。

ブラーグ学派の創始者の一人であり、現在、M.I.T. およびハーバード大学の教授である Roman Jakobson は文字どおり、言語学界の巨峰ともいふべき存在である。

1896 年モスクワに生まれ、1918 年モスクワ大学で学士号を得、ブラーグに亡命後、1926 年ブラーグ学派を結成、その後ナチス・ドイツに追われ、アメリカに移住、現在にいたっている。博士の研究分野は音声学、言語学を中心に情報理論も含み、きわめて広い範囲にわたっている。

国際セミナーは7月26日より8月5日まで社会文化会館で開催された。内容は音韻論、文法論を中心に、意味論、言語心理学に関しておこなわれた。その間7月27日夕、朝日講堂で「言語と文化」と題する公開講演がおこなわれ満員の盛況を呈した。

なお、夫人の Krystyna Pomorska Jakobson も、M.I.T. の教授としてポーランド文学、ロシア文学を担当し、7月28日午後ロシア文学についての講演をおこなった。

セミナーの内容については「ことばの宇宙」8月号に簡単に記されている。

GPSS の開発者、G. ゴードン氏来日

現在まで、もっとも広く利用されているシミュレータ「GPSS」の開発者として知られている G. ゴードン氏が、日本アイ・ビー・エムの招きにより10月4日来日、10月13日まで情報処理学会主催の講演をはじめシンポジウム、懇談会などを行なった。

ゴードン氏は、ロンドン大学の数学修士課程を修了後、英国においてミサイル誘導のための電子計算組織の設計研究に従事し、数々の業績を残した。1956年に米国に渡りウェスティングハウス社に入社、ミサイル誘導用リアル・タイム電子計算組織の設計問題を解決するためのシミュレーションの方法を研究し、その後ベル研究所に移り通信用電子計算組織の設計開発に

従事した。

1960 年 IBM コーポレーションに入社して、初期のテレ・プロセッシング・システムの開発に尽力したが、その後、電子計算組織設計のため、これまで応用した



シミュレーションの方法を発展させて、開発したの「GPSS」であり、汎用シミュレータとして現在まで各方面にもっとも広く利用されている。

現在ゴードン氏は IBM コーポレーションのニューヨーク・サイエンティフィック・センターの所長として、効果的都市計画のための方法に関する研究に電子通

万国 OR 会議 (ORAW Japan Meetings)

第1回万国 OR 会議 (Operations Research around the World Japan Meetings) は昨年8月17日、17日および18日の3日間開催され、まず17日の京都大会は京都国際会議場で、次いで17日および18日両日の東京大会は日本都市センターで、内外の参加者のもとに開催された。

京都大会では、日本 OR 学会会長土光敏夫氏、会長近藤次郎教授および京都市長などの挨拶に引きき5件の論文発表および東工大松田武彦教授、本会チェアマンである SDC (System Development Corporation) の Walsh 博士と、ノースカロライナ州の Nicholson 教授による三つの特別講演が行なわれ、方からは1階の食堂で盛大なカクテル・パーティが開催されて幕を閉じた。

次
利用
問題
公共
OR
行な
ルで
が出
発
アブ
ージ
り見
昭
記念)
大学
成の
会を
この
なわ
1.
2.
次い
よって
発生さ
を呼ん
電子通
う)。
1.
2.
3.
4.
5.
6.
7.
8.
9.

次いで東京大会では、日本都市センターの3会場を利用して八つの部会、すなわち信頼性、計算方法、決定問題、探索理論、経済への応用、経営への応用および公共への応用、と二つのパネル討論会（comparative ORおよび軍備コントロールにおけるORの役割）が行なわれた。なお17日6時からは赤坂プリンスホテルでアメリカ、イタリアおよび日本のOR学会長などが出席してバンケットが開催された。

発表論文の中には、情報システム、マン・マシン・アプローチおよび都市計画に対する大規模なシミュレーション適用例など、情報処理に関連した論文もかなり見受けられた。

昭和42年度電子通信学会開かる

昭和42年度の電子通信学会全国大会（創立50周年記念）は、10月、21、22日の2日間にわたり早稲田大学において開催された。情報処理関係では、音声合成のシンポジウムが行なわれ、多数の聴講者を集め盛会であった。

このシンポジウムでは、冒頭に次の二つの講演が行なわれた。

1. 基礎研究としての音声合成 藤村 靖(東大)
2. 音声合成の応用 坂井利之(京大)

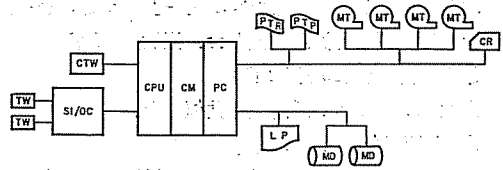
次いでデモンストレーションとして、下記の人々によって、各研究機関で研究されている音声合成装置で発生させた音声の録音テープが再生され、多大の興味を呼んだ（このテープはソノ・シートに再録されて、電子通信学会誌の附録として近く発行される予定という）。

1. 石井威望(東大) FACOM 万国博展示用
2. 藤崎博也(東大) OKI ターミナル・アナログ型
3. 比企静雄(東北大) ターミナル・アナログ型
4. 小川康雄(明大) 「明大校歌」・「荒城の月」など
5. 坂井利之(京大) ゼロ交差法によるもの
6. 藤村 靖(東大) ベル・ラボとの合作
7. 斉藤収三(通研) ターミナル・アナログ型
8. 松井英一(電試) 「モモタロウ」の朗読など
9. 加藤康男(日電) 「天気予報」のアナウンス

最後に、関 英男氏の司会により、高橋・大泉・坂井・藤崎・藤村・中田各氏による、討論会が行なわれた。

KEIO-TOSBAC TSS デモンストレーション

慶応義塾大学では、約2年前から東京芝浦電気株式会社（KEIO-TOSBAC TSS）の開発を行なってきたが、昭和42年9月25日都下小金井にある慶応義塾大学工学部中央試験所計算センターにおいて、実験的なタイムシェアリング・システムが披露された。このシステムには TOSBAC-3400-30 に基づいており、これに新たに開発された端局および、端局制御装置を接続している。KEIO-TOSBAC TSS の概要は下図のとおりである。



当日は2台の端局を用いて、人と計算機とのスムーズな会話に便利な“会話型 FORTRAN”がわが国で初めて使用されると共に“卓上計算機（desk calculator）システム”が使用された。会話型 FORTRAN で作成されたプログラムはファイルとして磁気テープに貯蔵しておくことができる。当日のデモ用プログラムも随時ファイルから引き出して利用された。またメモリ交換には磁気ドラムを用いている。

披露には全国から約350人もの人達が参加し、これを見ても、いかに多くの人達がタイムシェアリング・システムに関心を抱いているかがわかる。

現在のシステムで使用している端局および端局制御装置はパイロット・モデルであり、本年末か来年初めに端局は TOSBAC DN-510 と、端局制御装置は、TOSBAC DN-230 と取り替え、端局の数も何台が増加される。さらに、現在各種のソフトウェアが開発中であることから、KEIO-TOSBAC TSS は一層発展していく途上にある。